

平成28年度 図画工作科教育にかかわる現状と課題

部長 細井 一 貞

1 図画工作科教育の動向

(1) 郡市研究会における研修の状況

19の郡市それぞれが創意工夫し、講演会（7地区）、授業研究会（8地区）、実技研修会（15地区）、作品鑑賞研修会（9地区）、美術館活用研修会（7地区）を実施し、図画工作科の振興と指導者の資質向上に努めている。その他、夏休み小中学生写生大会（1地区）や児童生徒作品展の実施（9地区）等にも取り組み、地域の図工・美術教育の振興に大きく貢献している。今年度の特徴として、「美術館活用研修会」の増加が挙げられる。内容としては、地元にある美術館の企画展や常設展を鑑賞し、学芸員の方から作品鑑賞のポイントについて学んだり、アートプログラムを体験したりする取組が見られた。中には、地区内の5年生児童を対象として、美術館での鑑賞学習を体験させたり、出前講座を依頼し、美術館と学校現場との連携について研修を行ったりした地区もあった。美術教育を広く捉え、公共施設の有効活用や本物に触れる体験を重視した取組が広がりつつある。

今年度は、10月に「新潟県小学校教育研究会指定 図画工作科研究大会」が糸魚川市立青海小学校で開催された。青海小学校では、3年間の指定を通して、「かかわりつくりだす力を培う図画工作科の創造」という研究テーマのもと、実践研究を積み重ねてきた。研究会当日は、約120名の参会者を前に、研究発表や2つの学年の公開授業、全校児童による「造形パレード」や「ギャラリートーク」、ワールドカフェ方式の協議会、そして、横浜国立大学准教授大泉義一様からの全体指導が行われた。

参会者からは、「今後求められる資質・能力（主体性、課題解決能力、コミュニケーション能力、多様性を受容する力、チャレンジ精神など）にからめて、図工が教科として存在する意義について、考えさせられました。ただ作品をつくる教科ということではなく、どういう力を付けるために、どんな題材を、どんな方法で授業するとよいのか、そのヒントが授業の中に、たくさんあったと思います。この授業の中で育つ力を、これからも子どもの姿から見ていくことが大切だと思います。」などの感想が寄せられた。

(2) 郡市研究会における研修の成果

次期学習指導要領の方向性を意識した研修が始まっている一方で、現場の教員が今、困っている課題をもとにした研修会も行われていることが分かる。キーワードとしては、「資質・能力」、「学び合い」、「題材開発」、「鑑賞活動の工夫」、「個別の支援」、「学芸員との連携」、「子どもの行為や表現の捉え方」、「共通事項と造形要素」などが挙げられる。また、子どもの作品を地域に展示し、広く一般市民の皆さんにも鑑賞していただくことで、作品が人と人をつなぐ「コミュニケーションツール」としての役割を果たすことになる。

2 図画工作科教育の課題

次期学習指導要領の中核となる「主体的・対話的で深い学び」について、図画工作科の視点で捉え直し、授業改善につなげていく必要がある。特に、「知識・技能」－「思考力・判断力・表現力」－「学びに向かう力・人間性等」の関係性や言語（言葉を使う）と非言語（言葉以外を使う）の関係性、活動と学びの関係性、伝統文化や日常生活との関連性など、育成する資質・能力を明確にし、指導の改善につなげていくことが今後の課題である。